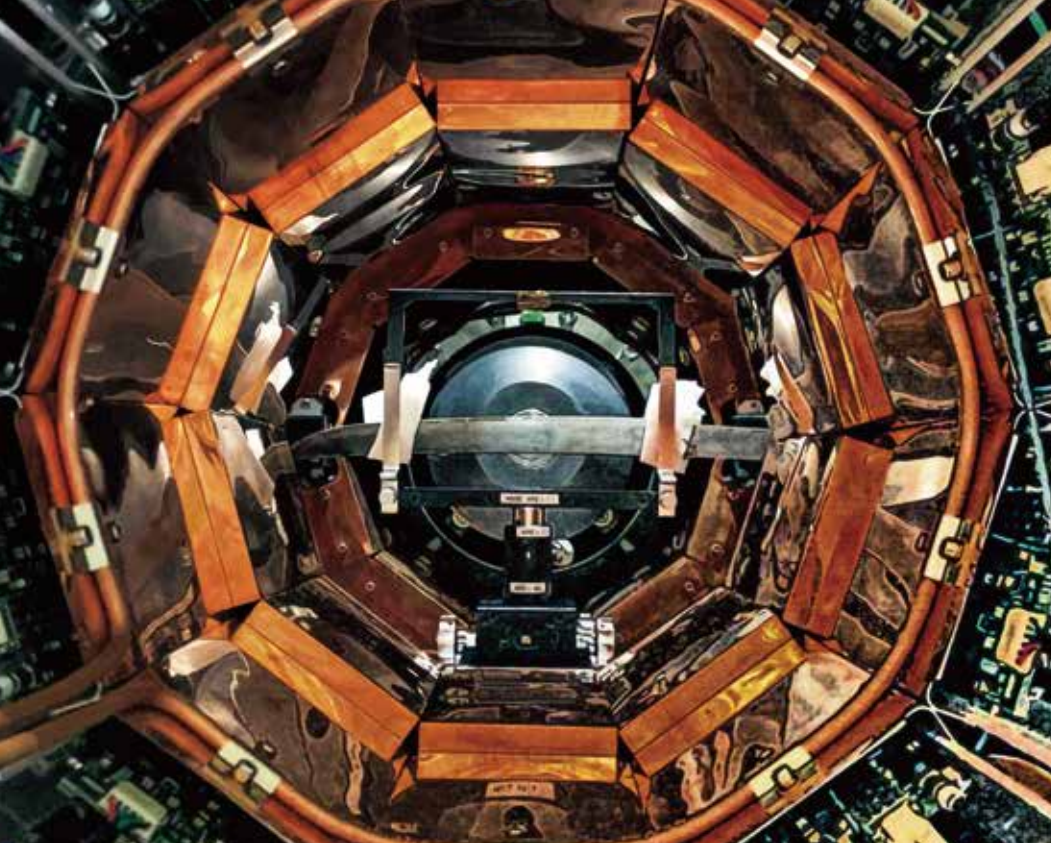




画像出典: ©2025 Google, ©CNES / Airbus, Maxar Technologies (Google Earthより取得)



画像提供: 公益財団法人アグチ伝統木版画技術保存財団

10月11日 **土** 13:30-16:00

国立科学博物館 上野本館 日本館 講堂

入場無料!

会場: 申込み先着 60 名
オンライン: 申込み先着 300 名



※ お申し込みには、Peatix への会員登録が必要です

<https://bunri2025.peatix.com>

講演

文化財と最先端科学、そして伝統技術の「いま」を知る特別講演会を開催します。

放射光や中性子・ミュオンビームを用いた“触れずに分析する”文化財研究、キプロスを舞台とした非破壊調査、そしてNHK 大河ドラマでも注目される浮世絵の伝統木版技術の継承など、理系と文系の枠を越えた視点から、文化と科学のつながりをひもときます。科学や歴史に興味のある方、どなたでもご参加いただけます。ぜひご来場ください。

13:35-14:15

文化財に触れずにビームを使って分析する

くぼ けんや
国際基督教大学 久保 謙哉 特任教授

専門：ミュオン科学

貴重な資料を分析するときに、傷をつけたり外観を変えてしまうことはできません。放射光と呼ばれる強力な光や、中性子ビームやミュオンビームを使うと、資料の表面から内部まで、資料に触れることなく使われている材料や素材の性質を調べることができます。どのような仕組みでそのようなことが可能なのか、科学的な原理を平易に解説し応用例を紹介します。



14:25-15:05

同時通訳 ミュオン科学の文化遺産と考古学への応用における進展、課題、および可能性——特に人類生物考古学に焦点を当てて

キルシ ローレンツ
キプロス研究所 Kirsi O. Lorentz 准教授

専門：人類生物考古学；先端科学技術応用

過去から現代に至るまで残されてきた遺物を研究する際、私たち専門家はもちろん、人類全体も、他分野で開発された最先端の技術や科学的アプローチを応用することで大きな恩恵を受けています。こうした最前線の探究には、学際的・超学際的な連携が不可欠です。ミュオンX線の文化財科学や考古学への応用も、その好例といえるでしょう。

本講演では、ミュオン科学を文化財や考古学、特に人骨考古学に応用する上での進展、課題、そして今後の可能性について考察します。これまでに達成された成果をふり返し、応用現場の視点から見た課題を整理したうえで、ミュオンX線や計測技術の専門家と、文化財研究者および（生物）考古学者との間の新たな学際研究のあり方と、その展望を探ります。



15:15-15:55

世界に誇る日本の浮世絵、その制作技術の現在

なかやま めぐり
公益財団法人アダチ伝統木版画技術保存財団 中山 周 理事

2025 年は、歌麿や写楽を生み出した版元・蔦屋重三郎を描く NHK 大河ドラマ「べらぼう」が話題を呼び、浮世絵への関心が改めて高まっています。

本講演では、その歴史的背景や芸術的価値に触れながら、制作を支える伝統木版技術の“現在”に焦点を当てます。絵師・彫師・摺師による分業で成り立つ浮世絵の制作技術は、職人の高齢化や後継者不足により継承の危機に直面しています。こうした中で技術の保存と次世代への伝承に取り組む財団の活動を通して、伝統的な木版技術が現代にどのように受け継がれているのかをご紹介します。

10月11日(土) 13:30-16:00

国立科学博物館 上野本館 日本館 講堂（東京都台東区上野公園 7-20）

会場 60 名、オンライン 300 名のどちらのお申し込みにも Peatix への会員登録が必要です。

お申し込みフォーム：<https://bunri2025.peatix.com>

お申し込みフォームに記載いただく個人情報は、本プログラムに関するもの以外の目的での利用や第三者に対する開示をすることはありません。入力いただいた情報は、フォームに入力した内容のコピーの自動返信、ウェビナーの接続情報のお知らせ、イベント終了後のアンケートのお願いなどに利用させていただきます。



日時・場所

お申込み

主催 高エネルギー加速器研究機構 物質構造科学研究所 **共催** 国立科学博物館、人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館、総合研究大学院大学 **協賛** J-PARCセンター、大阪大学核物理研究センター（RCNP）、日本中間子科学会、大阪大学フォアフロント研究センター・先端ミュオン科学による文理協力型学術創出プロジェクト、特定放射光施設ユーザー協団体（SpRUC）文化財研究会、学際領域展開ハブ形成プログラム「人文科学と材料科学が紡ぐ新知創造学際領域の形成」